OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	内藤博士追憶談
Author(s)	狩野, 直喜
Citation	懐徳. 1934, 12, p. 17-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88920
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

內藤博士追憶談

狩野直喜
（藤塚誠二速記）

內藤博士が亡くなられたといふことは、大きく言へば日本の學界、もつと大きく言へば、この世界に於ける東洋の學問の一つの損失である。小さく言へば、懷德堂としても大へんな損失である。ちやうど內藤博士と私とは懷德堂の顧問といふ席を汚して居る。私に取つては肝腎な相棒がなくなつた譯で、誠に心細い次第である。

內藤博士の學問に就ては、一般の人が、たゞえらかつた學者だと言つて居ります。或は博覽強記で四庫全書の化物といふやうなことを言つて居る。その博覽といふことは、これは動かすべからざる所であるけれども、博覽といふことゝ、たゞものを知つて居るといふことゝは違ふ。論語にも博文約禮といふことがあつて、博があると同時に約がなくちやならん。內藤博士はこの點から言へば、博覽で生字引のやうにどんなことでも知つて居られたが、其本領はやはり歷史家である。その歷史家といふ立場から、普通の歷史家よりもつと以上に幅が廣くて、色々な方面のことを知られて居る。さうしてそれを要約して、歷史家の立場でそれを纏められた。そこにえらい所がある。それは內藤博士の經歷

といふものが、御承知の通り吾々と違ふ。一般の人は中學校から高等學校、大學といふやうな、ちやんときまつた道を履んで行く。惡い言葉で言ふと、馬車馬みたいなもので、ずつと或軌道を行つて居る。さうして規則で定められた學問を學んで、規則で定められた先生の講義を聽き、さうして卒業してから同じ道を深く自から進んで往くのである。內藤博士は若い時から新聞社にはいられた。さうして幾つの年であつたか新聞社をやめて、それから大學の教授になられた。吾々と行く道が違つて居る、さうして新聞社に居られる時は、傍ら本を讀まれたことは申すまでもないが、其讀方が、その職務の上から吾々とは違つたと思ふ。本職が新聞記者であるから、本を讀むには自分の趣味といふか、或は知識欲といふか、どんな本でも讀んで構はん。何もそれをものにして試驗を受けるとか、或は著述をするとか學位をとるとかいふ目的は更にないわけである。又博士は歷史家として支那の歷史、殊に滿蒙といふやうなことに興味をもつて居られた。これは新聞記者として現代の支那といふことを知り、政治的に支那を觀るといふこともあつたでらう。さういふ工合にして非常な浩瀚な廣い知識をもつて居られた。それを大學の教授になつてからずつと纏めて講義をするといふことになつた。その意味から言ふと、博士の學力は大學の教授になられる前から、一般の天下の人が認めたのである。それが段々整理されて來た。その點は博士に取つて非常に都合がよかつたかも知れない。

內藤博士のえらい所は、今言ふやうに色々な方面がある。吾々は本の名前さへ知らなかつた本の話

もされた。それは斯ういふことが書いてあるといふだけでなく、此處に大事な所があるとか、たゞ漫讀をするだけでなく、本に就ては皆要所々々を讀まれて居る。そこが雜駁な知識をもつて居る人と、學者としての博覽といふこと、非常に違ふ所である。たゞ世間でものを澤山知つて居るといふことで內藤博士をほめる人があるけれども、それはまだ內藤博士の眞價を知らない人の言葉である。

もう一つは內藤博士の經歷であるが、內藤博士は自分の子達には中學に入れ、高等學校、大學といふやうに、ちやんと道を取つて學問さして居られる。內藤博士自身が取つた道といふのは、これは色々なその時の事情からその道を取つたので、これがよかつたとは思つて居られなかつたかも知れない。併し吾々から見れば內藤博士のやうな天分のえらい人は、普通の學校教育の道を取られなかつたといふことが、却つてその大を致したのであらうと思ふ。若し內藤博士が普通の道を取られたとしても、あゝいふ人であるから、えらい學者になつて居られるに違ひない。學校教育では隨分直接にその專門の學問と關係のないやうなことを、規則でやらされて居るやうなこともあるが、初めから自分の開拓する道を辿つて、それに必要な本を讀まれたといふことは、却つて都合がよかつたのぢやないかと思ふ。併し私はいつも若い人に言ふのであるが、それは內藤博士のやうな人であるからえらくなられたのである。內藤博士の辿つたやうな道を取つたら、誰でもえらくなるかといふと、それは大へんな間違ひである。內藤博士のやうな人は百人か千人の中に出來るのであつて、誰でもあゝいふ人になられる

ものぢやない。矢張學校教育が定石であると思ふ。但學校教育といふものは間違ひのないものであるか知れんけれども、内藤博士のやうなあゝいふ人には却つて邪魔になつたかも知れん。私は内藤博士があゝいふ經歴を取られたといふことが、愈々其大をなした所以であらうと思ふ。そのことは直接に内藤博士から私は聞いたことがある。僕は新聞記者を長くして居つたから、色々役に立たん本を讀んだが、併し今になつてみると、案外それが役に立つ。これは普通の學校經歴ばかりをやつた人には、そこまで手の届かん所があるが、自分は新聞記者をしたゝめに、色々な雜駁な知識を得て、それが今日役に立つのだ。といふことを話されたことがあるが、如何にもその通りである。併しそれは内藤博士ばかりでない。自分のことを言ふちやおかしいけれども、私なんかでも、小學校に行つて、それから鄉里の先生の家塾に行き、十七位まで一通り年に相應な漢學の教育を受けて、それから東京に行つて、今日いふ高等學校にはいつた。それから勉強して大學に居つたのも、平均年齡以上であつたと思ふ。併し今日から考へると、田舍で道草を喰つた事が別に損をしたとも思はないが、尚更内藤博士のやうな天分の高いえらい人は、高等學校とか大學などにはいられなかつたといふことが、益々内藤博士の學問を大きくした所以だらうと思ふ。

學者といふものは一概に言ふと、當世の事に迂闊である。支那の事を知つたつて、たゞそれを過去の事實として知つて居るだけであつて、現代の生きた支那の政治といふものに就ては、完全に理會す

るといふことは、その學者の本分でもなく、又むつかしいことである。然るに内藤博士は昔新聞記者であつて、實際に支那といふものを觀て居られた。支那に關する色々な著述もあるやうであるが、それがやはり學問に影響して、學問にしても鋭い立派な觀方をして居る。思ひつきが人と違つて居る。これなんぞもやはり新聞記者であつたといふ一つの原因である。

併し新聞記者なんかも、内藤博士が大阪朝日に居られたといふ時代と今とは違つて居る。今日所謂大新聞の記者といふやうな人で、後には大學の先生になるといふやうな人があつて欲しいけれども、恐らくそんな人はなからう。又そんな大學の先生になるやうな素質は、今の新聞記者ではもてんだらうと思ふ。或は採用しないだらうと思ふ。（昭和九、八、一九）

内藤湖南先生を憶ふ

小倉正恆

内藤湖南先生には本年春以來御重病と承り心痛に堪へず、切に御回春を祈つて居りましたところ、皇天無情遂にあの偉大なる學者の即世を見るに至つたことは、洵に遺憾限り無き事であります。

内藤先生の御逝去は、凡ゆる方面に於て痛惜せらるゝところであるが、我懐徳堂に於ては常に懇切に